

柳雨生と日本

——太平洋戦争時期上海における「親日」派文人の足跡——

杉野元子

I 終戦時の上海

一九四五年（以下「一九」は省略）八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾し、降伏した。日本の敗戦の知らせは、國民黨統治地域、共產黨統治地域の中國人のもとより、日本占領地域の中で日本の侵略行為に對して抵抗の姿勢をとり續けた中國人や非協力の立場を貫き通した中國人にも大きな喜びをもたらした。しかし日本の軍・政府機關や汪精衛政府と何らかのつながりをもった中國人は、「漢奸」の二文字を我が身に刻まれる恐怖に苛まれることとなる。武田泰淳は、短篇小説「獸の徽章」（五〇年）の中で、日本敗戦後の上海の様子を次のように書いている。

終戦後の上海ではこの二文字「漢奸」の二文字は、白く厚い皮をブラ／＼揺らせて運ばれて行く豚の屍の、深紅の血に汚れた切口のやうに、どのやうな喧騒の街頭でも、靜寂の密室でも、人々の感覺にからみついて離れなかつた。それは日本の日常で聽く「戦犯」の二文字より、はるかにどぎつい色彩と堪へがたい臭氣をおびて傳へられた。許しがたい惡、スパイ、裏切り、奇怪な非人間的な異物、その他あらゆる怖るべき内容を充滿させて、それ

は凝結してゐた。中國の市民である以上、その醜い像のかたはらを、何らかの身ぶるひに似た感情なしに素通りはできなかつた。¹⁾

武田泰淳は四四年六月に上海に渡り、そこで終戦を迎える。この小説が傳える終戦後の上海の状況は、武田泰淳自身の見聞がもたせていると思われる。上海では終戦とともに「漢奸」問題が急浮上してきた。上海を接收した蒋介石國民政府は九月初めから漢奸逮捕に着手し、一月三日には、法的制裁の對象となる漢奸の範圍を規定した「處理漢奸案件條例」十一條を公布し、一月六日には、漢奸の量刑を規定した「懲治漢奸條例」十六條を公布した。また四六年末を漢奸告發の最終期限と定め、漢奸の逮捕と裁判を急ピッチで展開していく。四七年度『上海年鑑』によると、上海高等法院檢察處が四六年度に新しく受理した漢奸の案件は一二八七件ある²⁾。また四八年度『中華年鑑』によると、四五年九月から四七年一〇月までの間に第一審の判決が下りた刑事事件のうち、「懲治漢奸條例」が適用された案件は全國で二〇〇〇一件あり、そのうち上海は九二六件、南京は五二二件、江蘇省は二〇四八件、浙江省は三七二一件あった³⁾。

このように終戦後、上海を中心とした地域で激しい漢奸狩りの嵐が吹き荒れる中、本稿で取り上げる柳雨生（本名・柳存仁）も逮捕され

た。柳雨生は太平洋戦争勃發後の上海文壇において、それまでは無名に近い存在であったのに、突如として頭角を現し、八面六臂の活躍をするようになる。また四二年から四四年まで三回開かれた大東亞文學者大會にいずれも参加するなどして、日本文學者と親交を結んだ。

そして戦後は「文化漢奸」として懲役三年の刑に服した。柳雨生についての先行研究としては、劉心皇『抗戰時期淪陷區文學史』（臺灣・成文出版社、八〇年）、Edward M. Gunn『Unwelcome Muse: Chinese Literature in Shanghai and Peking, 1937-1945』（Columbia University Press、八〇年）、陳青生『抗戰時期的上海文學』（上海人民出版社、九五年）、徐迺翔・黃萬華『中國抗戰時期淪陷區文學史』（福建教育出版社、九五年）、周海林『風雨談』、その言説に包含された眞實と虚構」〔淪陷下北京一九三七—四五 交争する中國文學と日本文學〕、三元社、二〇〇〇年）が挙げられるが、いずれも太平洋戦争時期に絞って論じている。また日本語文獻への目配りも不足していて、わずかに周海林論文の中で四二年一月一日付『日本學藝新聞』に掲載された大東亞文學者大會關連記事への言及があるのみである。

そこで本稿では、中國語文獻のみならず日本語文獻についても幅広く当たり、柳雨生自身の言説と日中同時代人知識人の多様なうねりある言説を交叉させながら、柳雨生が辿った現在に至るまでの長く起伏に富む人生の道のりを、太平洋戦争開始前、太平洋戦争時期、終戦後の三つの時期に分けて時代順に追跡し、太平洋戦争時期に柳雨生がどのような経緯で対日協力を踏み切ったのか、また實際にどのような対日協力をおこなったのか、そして対日協力の結果、終戦後はどのような運命にさらされることになったのかを明らかにしたい。またそのことによって柳雨生が橋渡しの役割を擔っていた日中兩國文壇の文學者

が戦争下の中國と日本を舞臺に繰り廣げた交流と摩擦の實態、そして「大東亞共榮圈」建設を旗印にして日本が中國に對しておこなった文化的干渉と侵略の實態の側面をも明らかにできればと思っている。

II 太平洋戦争開始前

柳雨生は一七年、北京に生まれた。少年時代には、中國古典の基礎を徹底的にたたき込まれた。二八年に廣州へ移り一年ほど暮らしたのち、上海へ移り東吳第二中學と光華大學付属中學（中學）は日本の中學・高校に相當）で學ぶ。中學時代、鴛鴦蝴蝶派の雜誌へ探偵小説などを投稿していたが、その後西洋文學や中國の新文學に親しむようになり、『論語』、『人間世』などの雜誌に散文を投稿した。また中學卒業前に『中國文學史發凡』を出版する。

三五年、念願の北京大學國文系に入學する。しかし三七年七月七日、盧溝橋事件が発生し、日中戦争は全面戦争へと擴大する。北京大學は長沙へ移轉するが、柳雨生は行動をとまにせず、父親の住む上海へ戻り、光華大學に轉入した。その理由について柳雨生は「家族の關係」とのみ記しているが、母を亡くし父と二人だけの家庭だったことが影響しているであろう。光華大學在學中、柳雨生は學友とともに學術雜誌『文哲』を刊行する。また卒業時には、實際には二年間しか學ばなかったが、北京大學の卒業證書を受領した。大學卒業後は『大美報』、『大美晚報』、『文史周刊』、『西洋文學月刊』の編集に携わったり、光華大學史學系、太炎文學院で教鞭を執ったりしながら生計を立てる。四〇年八月、隨筆、小説、古典文學研究論文を収録した『西星集』を宇宙風社から出版する。

四〇年八月二八日、柳雨生は上海を離れて香港へ移る。上海出發時

には、香港を経由して奥地へ向かうことも選擇肢に入れていたが、結局香港に留まり、香港政府文化檢察官の職に就いた。柳雨生は「談自傳」の中で、香港にいたとき「鄒韜奮、茅盾、長江と論戦したが、後に悔いて止めた」と書いているが、その論争の具體的な中身は明らかにされていない。茅盾が香港に到着したのは四一年三月だが、來てすぐに、「新聞雜誌（當然ながら進歩的な新聞雜誌）の空白欄が三八年當時と比べてずっと多くずっと大きくなっている」ことに氣づく。そしてその空白欄について検討した結果、以前より「香港政府のあの検査官たちの腕前が確かに向上していることがわかった」と書いている。また鄒韜奮は四一年三月に香港に到着し、五月一七日に『大衆生活』を復刊するが、この雑誌は検閲による伏字や空白欄が極めて多い。さきに柳雨生が「論戦」したというのは、文化檢察官として、鄒韜奮、茅盾、範長江の言論を取り締まったことがきっかけとなり摩擦が生じたのかもしれない。

Ⅲ 太平洋戦争開始後から日本敗戦まで

①香港から上海へ

四一年二月八日、日本軍がハワイ眞珠灣を奇襲、太平洋戦争が勃發した。日本軍は香港にも進攻し、イギリス軍と戦火を交えるが、二月二五日に攻略した。柳雨生は當時の状況について「海客譚瀛嶽」の中で、「香港島は民國三〇年二月二五日、アジア人の手に再び戻った。翌年三月一七日、私は廣州に到着した。苦しい生活を送っていたが、四月二八日やっと『筑後丸』に乗って上海に戻ってくることでできた」とごく簡単に觸れているが、四三年五月に書かれたこの文章は、日本側の目を意識して事實や本音を隠している可能性が高い。

日本占領下の上海では厳しい言論統制が敷かれたので、當時の文獻を讀むだけでは、そこに暮らす人々の實相をつかむことが困難である。もし柳雨生が戦後、この時期のことを回想する文章を書いていればそれらを参照することができるが、そのような文獻も存在しない。ただ幸いなことに、先行の蘇青研究者らがやはり指摘し、筆者もまたそう判断する一つの手がかりがある。それは、蘇青が戦後間もない時期に書いた自傳體小説『續結婚十年』（四海出版社、四七年）で、その中に明らかに柳雨生をモデルにしたと判断できる人物が登場してくるのである。もとより小説中に書かれたことを事實として鵜呑みにすることはできないが、柳雨生の内實に迫るための貴重な手がかりとして、本稿ではこの小説を参照することとする。

蘇青は日本占領下の上海で拔群の人氣を博した女性作家であるが、その代表作『結婚十年』（天地出版社、四四年）、『續結婚十年』は、蘇青自身の體験や本音が大胆に語られているために大きな評判を呼んだ。『續結婚十年』は四二年から四六年までが時代背景となっているが、この中に柳雨生をモデルとしたと見なせる人物・潘子美が登場する。この小説の語り手「わたし」（名前は蘇懷青、蘇青がモデル）は、潘子美が香港から上海に戻ってきた経緯について次のように語っている。

もともとは香港で仕事をしていたが、その後香港で戦争が始まり、彼は何もかもすべてを失った。私費米國留學のために苦勞して蓄えた爲替手形は、一朝にして烏有に歸した。彼は香港で行商人をしたこともある。その後難民船に乗って上海に逃げてきて、古稀間近の老父と抱き合い大聲で泣いたが、老父は彼が奥地に行くのを許さなかったので、上海に留まらざるを得なくなり、『中國報』

の編集者となった。⁹⁾

この小説をもとに、柳雨生が上海に戻ってきた経緯とその後奥地向かわずに上海に残留した経緯について推測するならば、おそらくそれはともに彼の希望によるのではなく、やむを得ずの選擇であつたと思われる。

② 汪精衛政府宣傳部

四〇年三月、汪精衛を首班とする南京國民政府が誕生した。四二年五月に上海に戻つた柳雨生はこの傀儡政府に加わり、宣傳部編審、新國民運動促進委員會祕書として健筆を揮う。¹⁰⁾ 四二年六月一五日には「新國民運動與青年訓練」(『中華日報』)を、四二年七月一日には「大東亞主義的再出發」(『中華周報』)を發表する。また四二年一二月には、柳雨生自らが書いた論文二篇(「新國民訓練的開始」、「新國民運動綱要」)を含む論文集『新國民運動論文選』を編纂して、太平書局から出版する。¹¹⁾ 「新國民運動綱要」は、四二年元旦に發表された汪精衛の「新國民運動綱要」について解説を加えたものであるが、その中で柳雨生は、「大東亞戦争」の最終目的は東亞民族全體の解放と獨立を勝ち取るためなのだから、「中國は當然のことながら機に乗じて奮起し、友邦日本と肩を並べて協力し、一致團結し、英米帝國主義の勢力を東亞の外に驅逐しなければならぬ」と主張している。¹²⁾ 柳雨生はこの時期、汪精衛政府宣傳部の一員として、政府の方針を代辨する文章を次々と發表した。

③ 第一回大東亞文學者大會

四二年一月三日から一〇日まで東京と大阪で大東亞文學者大會が催された。中國代表は合計一二人、そのうち華中から選ばれたのは周化人、許錫慶、潘序祖、周毓英、丁雨林、龔持平、柳雨生の中國人七

名と南京政府宣傳部顧問・草野心平で、柳雨生は最年少であつた。本會議は四日、五日の兩日にわたつて東京の大東亞會館で開かれたが、柳雨生は「大東亞精神の樹立」を議題に掲げた四日午前の會議の席で發言し、最後を「われわれ、東亞の文學者達は彼等の思想(米英侵略主義)を打倒し、指導精神確立の責任を盡し、全東亞の文學者をして東亞新精神の樹立に一致協力しなければならぬ」と確信する次第であります¹³⁾ という言葉で締め括つた。

柳雨生は來日中に多くの日本文學者と面識を得たが、とりわけ菊池寛とは親しく交わつた。菊池寛は柳雨生について次のように書いている。

中支から來た代表の中の柳雨生君は、二十七歳で有爲の秀才だつた。英文學と支那文學とを専攻してゐて、その作つた詩なども新聞に發表されてゐた。／曾て林語堂が、その才能を認めて、米國への留學を勧めたが、期限が長いのと、老父が居るので謝絶したと云ふことだが、頭腦がよく好學の青年である。かう云ふ人に、日本へ二、三年留學させて、日本を研究して貰ふと、將來日華親善のために大いに役立つのではないかと思つた。¹⁴⁾

また巖谷大四も柳雨生に好印象を得たらしく、次のように書いている。

中華民國の代表の一人である柳雨生氏は、若冠二十七歳の美青年で、銀ぶちの眼鏡がすこしもいやらしくなく、いかにも聰明そうに見える、日本人といわれてもわからないような小柄の、ものやわらかな中に強い意志をひめた人だつた。菊池さんが、非常にこの青年を氣に入つて、料亭へつれていったり、自宅へ泊めたりした。英語は達者で、日本語は片言だつた。私もこの人と仲良しに

なつて、片言の日本語と片言の英語で話し合い、歸國後も二、三度文通した（この人は翌年の第二回大東亞文學者大會にも來日した）。

柳雨生は歸國後の四三年三月に、訪日の思い出を綴つた「異國心影録」（『古今』第一九期）を發表する。柳雨生はこの隨筆の中で、日本文學者との交流の様子をいろいろなエピソードを交えて生き生きと傳えた。中村利男は四三年四月に『大陸新報』紙上で、「異國心影録」は「東京の文士を見る目が甘く皮相であるのが遺憾である」と批判したが、それに對して柳雨生は、「私はこの『異國心影録』において中國作家達に對し日本の眞實、親善及び日本國民の好意ある要望を受けよと大膽に提言してゐるつもりだ。この日本の眞實、日本國民の好意ある要望といふ點を完全に辨へぬことには相互の認識も親善も形式的な皮相的なものに終り、東亞解放戰爭への協力も淺薄且つ虛弱なものになり終るのである」と反論した。また柳雨生は、「異國心影録」の中で菊池寛「恩讐の彼方に」は藝術的價値の高い作品であると譽め稱え、「この物語の題名の主旨は、人と人との間の恩讐關係について語るということだが、私は國と國との間の關係も、理知的な見方であらうと、感情的な衝動であらうと、この小説から一つのはっきりとした道理を悟ることができるのではないかと思う」と書いてゐる。これに對し陳青生は、「柳雨生の意圖は明らかである。當時日本が中國を侵略したのは、實際には中國が英米の隸屬から抜け出すのを助けるためであり、中國を強く立派にさせるためなのだから、中國人民、とりわけ中國人作家は、理性の面からも感情の面からも、日本に感謝し、抗日を放棄し、中川實之助の『恩讐の彼方に』を學び、日本と手を携え『大東亞共榮圈』というすばらしい理想を實現しなければならぬ、

ということなのである」と厳しく批判してゐる。また周海林も、「『異國心影録』は大東亞精神に最も通じる言説を敘情的に述べたものである」としてゐる。

たしかに「異國心影録」からは、日本に厚い信頼と敬愛の情を寄せ「親日」派文學者の面目が浮かび上がってくる。しかしこの「親日」派文學者は、同時に苦澁に満ちた表情も浮かべてゐるのである。筆者は、この點にも留意したい。「異國心影録」には、次のような一節がある。

私は今回日本へ行ったが、この時の心境の異様さは歴然としてゐるし、またその寂莫と空虚も歴然としてゐる。世界全體が際限なく續く戦火の中で烈しく燃えさかっている。人類の聰明さと智恵によつて、理想にかなう世界が半ばまで作りあげられたが、偽りと私欲によつて壊滅した。世界中の人々はこの劇烈な争いの中で、明らかに二つの堅固な陣營に分かれた。どちら側の人間も、自分こそが眞理と正義を辨えていて、相手側は私欲と偽りにまみれてゐると思つてゐる。しかし本當の眞理というのは、私個人の意味な私見によれば、鮮やかにきらめく戦場や戦火が天をも焦がす戦地においてすべてが決定されるべきではなく、暮色蒼茫たる微光が差し、涼しい秋雨が降り止み、縁の苔が一面に生えている深い洞窟、その中で仰向けに寝て瞑目靜思してゐる裸足の哲人の言葉によつて決定されるべきであると思う。しかしこの哲人は、おそろくいつもなかなか口を開こうとはしないのである。

天皇制ファシズムが猛威を振るう日本へ來た柳雨生は、「異様」な心持ちに襲われ、その胸には「寂莫」と「空虚」が去來してくる。そして「眞理」と「正義」はわれらが掌中にありと信じ、「大東亞戦争」

完遂への執念を燃やす日本人に對して、戰爭行爲の虚しさと愚かしさを説き、水を差そうとしているのである。

「異國心影録」には、この箇所以外にも「寂莫」という言葉が繰り返し使われている。たとえば、菊池寛宅で詩を作ったが、その詩の境地は「寂莫と眞誠」で、「寂莫は自分の心境であり、眞誠は自分の人に對する態度である」と書かれているし、この小文を執筆した時には「苦しい寂莫の中にいた」とも書かれている。

「異國心影録」の掲載誌『古今』は、朱樸によって四二年三月に創刊された。朱樸は汪精衛政府の要員であり、しかも周佛海がこの雑誌に極めて大きな援助を與えていたため、汪派の刊行物だと目されていた。このような雑誌には通常、中日親善に水を差すような不純物が紛れ込むことはないのだが、柳雨生の「異國心影録」は、主旋律として「親日」を奏する一方、その奥底において「寂莫」の調べを響かせたのである。

④『風雨談』創刊

四三年四月、柳雨生は文學雑誌『風雨談』を創刊した。『風雨談』は創刊から第一六期（四四年一月・四五年一月合刊）までは毎期一四〇頁程度の厚さを誇る大型文學雑誌であったが、第一七期からは三二頁に激減する。日本側の戦況の悪化により、物價高騰、用紙不足が深刻化したことによる。そして第二二期（四五年八月）を最後に停刊する。第九期「編後小記」には、「本誌の理想は純文藝刊行物であり、総合雑誌ではない」、「本誌は翻譯よりも創作を、作者の名聲よりも優秀な作品を、阿諛追従よりも正確な批評を重んじる」という編集方針が表明されており、太平洋戦争勃發後の沈滞していた上海の文學界に一石を投じようとする柳雨生の氣概が充分傳わってくる。『風雨談』

は日本陸軍報道部管理下の太平出版印刷公司以印刷・發行されたが、文學雑誌を標榜しているので、政治や戰爭を正面から論じる時評は一篇も掲載されていないし、また「大東亞精神」の樹立と昂揚を訴えるような露骨な「親日」作品も掲載されていない。この雑誌には周作人、柳雨生の散文、潘序租、丁諦の短篇小説、路易士、南星の新詩、譚正璧、羅明の脚本、譚惟翰、蘇青の長篇小説などが掲載された。

河上徹太郎は第二回大東亞文學者大會出席のために再来日した柳雨生のことを、次のように書いている。

その前夜（四三年九月五日）も同じやうに私は深夜の訪客を受けたのであった。矢張り十二時頃、私は部屋へ歸つて、風呂場で洗濯をしてゐた。そこへ柳雨生が「カワカミサン、オフロ？」といひ乍ら、はいつて來た。彼は私の歸りを待ちうけてゐたらしい。腰を下すと、今日は貴君に上海の文化界の事情を説明したい、といつて、腹藏ない報告をしてくれた。（……）彼が昨年第一回文學者大會から歸國して直ちに新國民運動促進會から身を引いて上海に來て一ジャーナリストになつたのも、文學運動を除いて正しい文化運動は今成り立たない、といふ信念からである。殊に彼が今春始めた自分の雑誌『風雨談』に對して持つ愛著は非常なもので、私には必要もない辨解めいたことさへいつて、第七號から充實させるから見てくれなどといった。ともあれ廿七歳の青年が、これだけの文學者を事變以來初めて動員した手柄は大きい。然し彼もゆくゆくは文筆生活に歸り、しかも専ら『風雨談』にのみ發表するやうになりたい、といつてゐた。

柳雨生は四二年五月以降、汪精衛政府宣傳部の一員として政治的發言を繰り返してきたが、『風雨談』創刊のころからは、文學者として

文學界で身を立てていく決意をしたと思われる。柳雨生は四三年五月四日付『大陸新報』に「東亞文學の鬪兵」という一文を寄せ、「實際私は長く東亞の新文學のために鬪ふ一兵士でありたいといふ牢固たる決心をもつてゐる。私は一個の文學者であり、政治家ではない。政治に對する興味はすでに失つてゐる。しかし現在の時局はどうか、世はまさに總力愛國、總力報國の秋であり、文學こそこの運動の根底の力となるべきである」と表明した。しかし柳雨生が太平洋戦争中に書いた時局關連の評論や論說からは「和平運動の鬪兵」の姿が浮かび上がってくるが、小説や隨筆から「東亞文學の鬪兵」の姿を見出すのはそれほど容易ではない。

柳雨生は、太平洋戦争中に二四篇の隨筆が收められた『懷郷記』(太平書局、四四年五月)および、九篇の短篇小説が收められた『撻妻記』(雜誌社、四四年一月)を出版する。『撻妻記』は未見であるが、その中の一篇「排雲殿」(原載『春秋』第三卷第六期、四四年七月)は、二〇年代の北京を舞臺に、良家の子女が大學生の青年に對して寄せる淡い戀心を描いている。登場人物の外見、しぐさ、心理状態を捉える筆致は纖細かつ流麗である。陳青生は『撻妻記』について、「大多數は男女の婚姻や愛情を描いた物語」であり、「人生の温かな情趣を示して味わうことを主旨としている」と評している。

また『懷郷記』所收の隨筆のうち、最後の三篇「異國心影錄」、「海客譚瀛錄」、「女畫錄」は、大東亞文學者大會參加のために二度訪れた日本での見聞を綴ったものであるが、それ以外の隨筆は、母校北京大學關係者の逸話、中國各地の風俗習慣、觀劇の感想などを綴ったもので、日本や時局とは無縁である。柳雨生が太平洋戦争中に書いた小説・隨筆の中で、「東亞文學の鬪兵」たらんとする姿勢がもつとも顯著に

窺えるものは、おそらく『懷郷記』所收の最後の三篇であろう。陳青生はこの三篇について、「當時の帝國主義日本を稱え、日本帝國の『大東亞聖戰』と『大東亞共榮圈』覇權構想を美化し鼓吹している」と評しているが、『異國心影錄』は上述したとおり作者の「寂莫」たる思いが綴られているし、四三年八月に執筆した「女畫錄」は、この一年間、日本文學者との座談會や茶話會に毎回參加したが、交流は表面的なものに止まり何ら成果がなかったという作者の失望感が率直に表明されている。また柳雨生は『懷郷記』の序文の中でこの三篇について言及しているが、「此の中に眞意有り、辨せんと欲して已に言を忘る」という陶淵明の言葉を引いて、この三篇の眞意は言外の所にあることをほのめかしている。そしてさらにこの三篇を熟讀すれば、「覆い隠された清らかな境地に觸れたり、作者の寂莫と苦惱を察したりすることができようであろう」と書いている。このように柳雨生の數少ない「親日」文學作品であるこの三篇からも、「寂莫」や「苦惱」や「失望」の色が滲み出ているのである。

⑥ 第二回大東亞文學者大會

第二回大東亞文學者大會は、四三年八月二五日から三日間、東京で開催された。中國代表は十七人で、そのうち上海代表は周越然、邱韻鐸、陶亢德、魯風、柳雨生、關露の六名である。柳雨生は本會議最終日の二七日、中國における文學雜誌の出版動向、日本文學の翻譯狀況、映畫界と演劇界における新しい動きなどについての紹介をおこなった。また二八日夜には九段軍人會館で催された第二回大東亞文學者大會大講演會に出席し、「日本文學界に告ぐ」と題する講演をおこなった。

この講演原稿は、原文が『中華月報』(四三年一月)に、日譯が『文學報國』(四三年九月二〇日)に掲載されたが、「顧みまずに日本

がもし大東亞戰爭を發動することがなかつたとしたならば我々中國人は相變らず姑息偷安の日を送つて恰かも奴隸のやうな卑屈な境涯に呻吟してゐたかも知れません」とといった「親日」派の面目躍如たる言辭で満たされている。

文學者大會外地代表は九月一日に東京を離れ、名古屋、伊勢、大阪、奈良、京都を見學、七日に下關へ到着し、それぞれ歸國の途についた。外地代表一行を大阪驛で出迎えた織田作之助は、柳雨生について次のように書いている。

二臺のバスで一行は宿舍の新大阪ホテルへ赴き、すぐ中食をとつたが、柳雨生氏があつといふ早業で和服に着かへてロビーへ出て來た『柳さん』と誰か日本の代表が聲を掛けると、にこつと振り向いてそして黒足袋にひっかけた草履をひきづりながら食堂へはいつて行つた。なんでもないことのやうだが、これだなと私は思つた。

柳雨生がこのような行動をとつた眞意は不明であるが、織田作之助を初めとする日本文學者たちは、このような柳雨生を、日本文化を愛し明るく社交性に富む青年として好ましく受け止めたことであらう。

九月六日午後、京都で河上徹太郎、林房雄、小林秀雄、沈啓无、蔣義方、草野心平、柳雨生の七人が懇談し、翻譯機關設置の件、留日文學研究生の件、中國出版界強化の件、中國文學統一團體結成の件について話し合つた。柳雨生は歸國後、中國文學統一團體を作るために奔走する。四四年一月に南京政府宣傳部が開いた中國文學協會設立準備會議の席で、宣傳部顧問草野心平、南京代表龔持平、上海代表柳雨生の北京派遣が決定された。四四年二月に、柳雨生たち三名は北京へ行き、華北文學者代表と文學協會設立に向けての折衝をおこなつた。四

四年四月一日付『大陸新報』には、中國文學協會が五月に「中國文學者代表二百餘名を首都南京に集めて盛大な發會式を舉行する運びとなつた」と報じられているが、種種の事情によりこの計畫は頓挫した。

③第三回大東亞文學者大會

四四年一月、南京で第三回大東亞文學大會が開かれた。中國からは四十數名が参加したが、上海代表は周越然、包天笑、傅彥長、張若谷、楊光政、路易士、陶晶孫、潘序租、柳雨生、邱韻鐸、楊之華、顧鳳城の十二名である。この時期、日本軍はマリアナ沖海戰の慘敗（四四年六月）、サイパン島失陥（四四年七月）、インパール作戰の慘敗（四四年三月～七月）と各地で敗退を續け、戰局は極度に悪化していた。また大會前日には汪精衛死去の知らせが参加者に傳えられた。岡田英樹が「武者小路、周作人、二つの目玉をかき、主催する文學團體をもたず、つめたい目にかこまれた第三回は、はなから成果など期待できる大會ではなかつた」と指摘するように、實質的な成果は何もあげられぬまま幕を引いた。

IV 日本敗戦後

蘇青『續結婚十年』第十七章「驚心動魄的一幕」には、魯思純（陶亢徳がモデル）・潘子美逮捕の場面が描かれている。四五年初秋のある夜、某局の男によつて某所に連行された蘇懷青は、魯思純と潘子美の家へ行き二人を外に連れ出すようにと依頼されるが、拒否する。魯思純・潘子美逮捕の情報が漏れることを恐れた當局は、蘇懷青を車に乗せて魯思純と潘子美の自宅前まで連行する。蘇懷青は車内に止め置かれ、二人の逮捕後やと歸宅を許される。いっぽう金戈「陶亢徳受捕一瞬」では、ある夜、陶亢徳・柳雨生逮捕の命令を受けた當局の人

間が二手に分かれて逮捕に向い、一時間二十分くらいの間に二人とも逮捕したと書かれている。「驚心動魄的一幕」と「陶亢徳受捕一瞬」とでは記述内容に多少齟齬があるが、柳雨生と陶亢徳が同夜に自宅で逮捕されたのは間違いないであろう。

上海高等法院は四五年二月一七日以降、提籃橋上海監獄内に臨時看守所と臨時法廷を設けて、すべての漢奸案件をそこで裁くことにした。四六年四月四日付『申報』は、四月三日に七一名の大漢奸が提籃橋上海監獄へ押送されたと報じているが、この七一名の名簿の中に柳雨生の名前がある。四六年五月一六日、柳雨生の公判が始まった。五月一七日付『申報』には、柳雨生の罪状が公判時の寫眞とともに掲載されている。

柳雨生 文化漢奸、廣東南海人、三十歳、「文字不鮮明につき中略」翌年五月上海に歸省、すぐに偽宣傳部に加わり、編集部の職務を擔い、林柏生のために奔走し、文化作家を引き込んだ。また中華日報編集者となり、何度も謬論を發表、「和平運動」を宣揚した。さらに敵が經營する文化機關「太平出版公司」のために、『新國民運動論文集』を編纂したが、この本は日本語に譯され、敵側からすこぶる賞賛された。しかも偽職在任中、東京「大東亞文學者大會」に出席した。(以下文字不鮮明につき省略)

六月一日付『申報』は、五月三十一日、「文化漢奸」柳雨生に對して「敵國と通じ、本國に反抗しようと圖った。懲役三年、公權剝奪三年、財産は殘された家族が必要とする生活費をのぞきすべて沒收に處する」という判決が下ったこと、そして「柳は判決を聽いて笑みを浮かべ、妻もまた顔を綻ばせた」ことを報じている。

漢奸裁判では、陳公博、褚民誼などの汪精衛政府要人に極刑が下さ

れた。文化界の巨奸と目された周作人は首都高等法院で懲役十四年の有罪判決を受けるが上訴し、最高法院で懲役十年に減刑された。柳雨生周邊の人物に目をやると、第一回大東亞文學者大會に出席した上海市社會福利局長・周毓英と中央電訊社編集長・許錫慶とともに懲役八年、第二回大東亞文學者大會に出席した中華日報編集長・陶亢徳は懲役三年の宣告を受けた。柳雨生は、上海を代表する「親日」派文學者として、三回開かれた大東亞文學者大會に出席した。しかも、三回ともすべて出席した中國人は柳雨生ただ一人である。したがって柳雨生にとって懲役三年という判決結果は、豫想より輕かったのかもしれない。

四五年三月から四七年一月まで上海で暮らした堀田善衛は五九年に、柳雨生の身の上を案じて次のように書いている。

上海での、いわゆる「終戦」は事實として八月十一日に來ていた。そしてその當日から、私は自分に金も能力もなんにもないにもかかわらず、ひそかに、また人に言い言いで、日本側に協力してくれた中國人諸氏の運命を胸に痛いものが刺さり込んで來たような氣持で氣づかっていた。殊に私は、私自身、ほんの一面識しかなかったのだが、大東亞文學者大會というものに參加した柳雨生や陶亢徳などの、侵略者であつた日本側に協力した文學者たちの運命を氣にした。(……)柳雨生は當時二十八歳で、(私自身は二十七歳)柳、陶の二人は一九四六年に叛逆罪により、各三年の懲役に處せられた。法廷での態度も、漢奸たちがよく言う「通敵救國」などというようなことも、となえず、みれんがましいところはなかった。陶一家は、戦後すぐに行方不明となり、柳一家に對しては、四六年一杯は室伏嬢と私とで、引揚げ同胞のおいて行っ

た日用品などをもって、ときどき、暮夜ひそかに見舞いに行った。さして交際があったわけではなく、一度しか會ったことはなかったが、行かないではいられなかった。もしあのとき捕ったりしたら、私も室伏嬢も漢奸幫助罪で裁判にかけられたであろう。それも覺悟の上であった。室伏嬢と二人で、前後を警戒しながら、そつと柳雨生の奥さんとお母さんと幼い子供たちが住んでいる家へ近づいて行くとき、私がいつも考えていたことは、あの大東亞文學者大會というものを考え出し、組織し、たとえこの二人を東京へ誘い出した日本のえらい文學者たちは、この二人の運命をどう考えるだろうか、ということであった。二人は、一九四九年、中國人民解放軍が上海に入るしばらく以前に、刑期満了して出獄した。／印刷所の門前に、ぼんやりと立って、私は當時の自分の行動をいろいろに考えてみた。／異民族交渉というものは、徹底的なものである。柳雨生、陶亢徳、ともに死である。文學者としては、死、である。このうち、陶氏は、私などよりもずっと年上であり、處世態度においても、單純な人ではないように見うけられたが、柳雨生は、なんにしても若かった。中國の文學史は、もししるすとすれば、敵に魂を賣った裏切文學者としてしるすのである。戦時倥傯、ろくに作品もなしえなかった彼等のことであるから、恐らくまったく無視するであろう。

また河上徹太郎も六四年に、大東亞文學者大會中國代表のその後を思いやうて次のように書いている。

あの頃の「中國代表」が今どんな暮しをしているのか、それを思うと私は良心のすき間風みたいなものを感じる。上海から來た柳雨生君なんて、小柄で薄髭を生やし、菊池さんなど本當にかわい

がっていたけれど。政治というものは怖いものである。私が十九年十一月に上海へ行くと、柳君は當時その地でしゅんである蟹で一杯吞ませてくれたりした。あのインフレの最中、私はありがたくて身にしてみた。毛筆の細字できれいな手紙を書く青年だった。⁸⁰堀田善衛と河上徹太郎は、共産黨政權下の中國に暮らす元「漢奸」柳雨生は、文學者としての生命を斷ち切れ、精神的にも物質的にも困難を極める生活を強いられるにちがいないと懸念していたのだろう。ところが堀田善衛は偶然なことから柳雨生についての消息を得る。草野心平の「ハワイ日記」(『風景』、七〇年四月號)を讀んでいた堀田善衛は、その中に「七月二日(水)『第2回講義』2P.11→4:40. 柳雨生(存仁)突然現われてビックリさせる。舊友突如」という一節を發見するのである。堀田善衛はすぐに草野心平に、「柳雨生が生きていたとは本當に近頃でのビックリ仰天という意味の手紙」を書き送った。草野心平は七〇年四月二五日付『東京新聞』に、柳雨生との再會の經緯を書いた文章「柳雨生は生きている」を發表する。草野心平は六八年六月に香港を訪れたとき、舊友から柳雨生がシドニー大學の教授していると知らされた。その後アメリカにいる柳雨生から手紙が届くようになり、草野心平は柳雨生と、草野が六九年六月から九月までハワイに滞在する機會にハワイで再會する約束をする。

柳存仁が突如現れたのは七月二日、自分の第二回目の講義をはじめる寸前だった。柳雨生である。八割方はそうだろうとも思っていた柳雨生だった。昔と同じように細い金縁の眼鏡をかけ、瘦身スマートの美男、昔とちがうのは白髪が生えたことと英語で話すことだった。彼は私の教室にはいって生徒たちと並んで腰かけた。〔……〕一緒にウィロースというハワイ式料理屋にヤング教授に

招待されたり、二、三回私のアパートメントにもきてくれたりしたが、一別以来の彼の行動について、私はほとんど何もきかなかつた。彼はオックスフォードで文學の學位をとっている。だからイギリスへもいっていたのだろう。彼も特別には何も私にきかなかつた。

戦時中、草野心平と柳雨生はともに汪精衛國民政府宣傳部に所屬していた。また二人はともに三回開かれた大東亞文學者大會にすべて出席した。しかし草野心平は日本人であるがために罪に問われず、柳雨生は中國人であるがために「漢奸」として牢に繋がれた。草野心平は柳雨生が海外で活躍しているのを知りほっとしたであろうが、激動の曲折があったのだから異邦の舊友の戦後の歩みについて問いただす氣にはなれなかつたにちがいない。しかし二人の沈黙の内にこそ、消えない戦争の傷口がのぞいているはずである。

柳雨生は五二年、共産黨政權下の中國を逃れて香港に移り住む。そして皇仁書院の中文科教員となり、校内演劇活動に打ち込む。香港時代の柳雨生は、小説『庚辛』（香港・大公書局、五二年）、研究書『中國文學史』（臺灣・東方書局、五八年）、話劇脚本集『在舞臺的邊緣上』（香港・齡記書店、五九年）などを出版した。柳雨生は六二年、三年間の有期契約講師という條件だったが、香港での安定した生活を捨ててオーストラリア國立大學中文系に赴任する。六六年には助教授として採用され、八二年に同大學を定年退職するまで勤続する。オーストラリア時代の柳雨生は、中國小説史と道教史の研究で目覚ましい成果を挙げ、漢學者として國際的な名聲を博する。代表的な著作としては、『Buddhist and Taoist Influences on Chinese Novels』（Wiesbaden・Otto Harrassowitz、六二年）、『Chinese Popular Fictions in Two

London Libraries』（香港・龍門書店、六七年）、『Selected Papers from the Hall of Harmonious Wind』（Leiden・E.J.Brill、七六年）、『New Excursions from the Hall of Harmonious Wind』（Leiden・E.J.Brill、八四年）、『和風堂文集』（上海古籍出版社、九一年）、『和風堂新文集』（臺灣・新文豐出版社、九七年）、『道家與道術——和風堂文集續編』（上海古籍出版社、九九年）がある。また九八年には母校北京大學に招かれて講演をおこない、二〇〇年にはその講演を含めた論文集『道教史探源』が北京大學出版社より出版された。また九二年にはオーストラリア政府から功績が認められ、オーストラリア勳章（AO）が授與された。

V 對日協力の内實

柳雨生は、太平洋戦争前までは本名「柳存仁」を用いたが、戦争中は字である「柳雨生」を用いて文章を發表した。そして戦後は、再び「柳存仁」と署するようになる。柳雨生は出獄後、過去に區切りをつけて新しい人生を歩むために、「柳雨生」という名前の使用を止めたのだろう。柳雨生は六八年に、清末から二五年ごろまでの舊式家庭の生活の變遷を描いた長編小説『青春』を香港・星島日報社から出版する。この本は柳雨生自身の家庭がモデルとなっており、柳雨生の出自と幼少時の生活環境を窺い知ることができる。しかし柳雨生は、太平洋戦争時代の自分をモデルにした小説はもちろんのこと、回想した文章さえもまったく書いていない。

柳雨生が戦時中のことに言及した数少ない文章の一つに、周作人の思い出を綴った「知堂紀念」（八九年）がある。柳雨生はこの文章の中で、戦時中の周作人の散文は「閑適を装っていたからこそ、作者は

『忍辱と苦』の年代に『儒家の正統であると確信する』ということをして隠れ蓑にして、いくらかの牙えた言葉が発することができたのかも知れない」とし、その例として國民の連帯に役立つ自國の言葉を大切にしようにと諭す文章、歴史を學んで教訓を汲み取るようにと促す文章、「儒家という古看板を用いて、人民大衆のために生存の權利をたたかい取る」文章を書いたことを挙げ、周作人に被せられた「漢奸」の汚名を雪ごうとした。

柳雨生は北京大學在學中に周作人の講義に出席した。また柳雨生が編集長をつとめた『風雨談』の巻頭には、しばしば周作人の文章が掲載されている。そして戦後香港に移り住んだあとも、周作人と數回手紙を交わしている。このように柳雨生は周作人と長年に亘って關係を維持してきた。さらに譚正璧が「彼〔柳雨生〕の文章を讀むとすぐに周作人先生のことだ連想される」と指摘するように、柳雨生の散文は周作人の影響を強く受けている。また柳雨生は周作人と同様に語學が堪能で、英語、日本語に精通し、ドイツ語、フランス語も相當高い讀解力を有する。さらに學問においても、周作人と同様に古今東西の文獻を博搜し、歴史、宗教、文學、言語など幅広い分野について研究をおこなっている。このように柳雨生にとって周作人は尊敬すべき師の一人であり、文章の風格と學問の姿勢の両面で少なからぬ影響を受けた。

しかし柳雨生と周作人はともに「漢奸」として罰せられたが、その立場からして戦時中の對日協力のレヴェルも内實もおのずから異なっている。木山英雄は、戦時中「偽」北京大學文學院長、「偽」華北政務委員會教育總署督辦などの「偽職」に就任した周作人について、「韜晦、抵抗のためであれ、あるいは身についた地聲であれ、彼の

『儒家』よりはすでに堂に入っており、少なくともこのような運命にただただもてあそばされ、あるいは彼の方から悪く便乗したような形跡は、ないのである」と評している。しかし柳雨生は周作人と比べたとき、はるかに若く人生經驗も乏しかった。周作人は盧溝橋事件勃發後、日本占領下の北京に残留することを決意するが、その時の年齢は五三歳であった。いっぽう柳雨生は盧溝橋事件勃發により北京大學で學業を続ける機會を奪われ、太平洋戦争勃發により香港での生活基盤を崩され、ついには四二年五月に日本占領下の上海に戻るが、その時の年齢はわずか二五歳である。

柳雨生は上海に戻るとすぐに汪精衛政府宣傳部に入り、政策宣傳の仕事で敏腕を振るう。柳雨生は「異國心影錄」の中で「私の個性は決して歴史や政治と絶縁するものではなく、また生活環境の束縛によって、往々にして情勢全體と關係をもつ。しかし私は單純な生活の愉快さと生活の美、さらには極妙奇特ないわゆる至善の境地に止まることを好む」と書いている。中學時代から散文や小説を雜誌に投稿し、中學卒業前には文學史の本まで出版した文學青年・柳雨生にとって、「文學」こそが最高の喜びをもたらす「至善の境地」の世界であつたろう。だが戦争によって既存の社會秩序が崩れ、混乱を呈する状況が生まれてくるようになると、若さと才能に溢れた柳雨生はその世界にあこがれながらもそこには止まらず、「和平」派として政治や歴史に積極的に關與するようになる。そして四三年前後からは活躍の舞臺をふたたび文學の世界へと移す。柳雨生は著名作家や中堅作家が上海を離れたり、筆を置いて蟄居したりして空洞化していた上海文壇の階段を急速に駆け上り、四二年一月には最年少で、のちの、終戦後の「漢奸」の汚名に繋がる第一回大東亞文學者大會の中國代表の一人に

選ばれ、この大會参加を契機に日本文壇との太いパイプを持ち、日本文學者との交流や提携に積極的になり出すようになるのである。

柳雨生が戦時中に書いた隨筆「學優」の中に次のような一節がある。私は人生とは劇場や舞臺のようなもので、私たちはみんな芝居をしているのだと思う。傑出した聖賢豪傑にもなることもあれば、狡猾で性惡な強豪になることもあるが、いずれにしても私たちがどのように振舞うかが肝心なのである。舞臺に上がった以上は、人のためにも自分のためにも、華々しく大業を成し遂げなければならぬ。

柳雨生が對日協力を踏み切った背景には、「抗戰」ではなく「和平」こそが救國につながるという彼なりの時局判断があったのだろう。柳雨生は己を激しく突き動かす歴史の波動の中に身を投じ、「和平救國」という大業を成し遂げようとしたのである。しかし劉傑が「日本の『和平工作』が、あまりにも『謀略』的な色彩が強いため、多くの妥協派を『漢奸』の立場に追い込んだ」と指摘するように、中國は最終的には「和平」ではなく、「抗日」の力によって勝利と解放を迎え、多くの妥協派は「漢奸」として獄に繋がれることとなる。この日本占領下の上海を生きた早熟な文學青年・柳雨生の大きな矛盾に満ちた人生の足跡の意味を、ここで手際よく解析し、きれいな説明することなどできることはない。しかし柳雨生が矛盾劇の俳優として舞臺に立ちながら、精神の深奥で見つめていたもの、それが「寂寞」であつたろうことはまちがいない。

堀田善衛は「漢奸諸氏も意志して日本側に加わって來たのだから仕方がないではないか、といった安易な宿命論に陥ってはならぬ筈である」と指摘している。對日協力をした人々をただたんに「漢奸」とし

て歴史の闇に葬ってしまうのではなく、彼ら一人一人の心の裏に入り、その内面の起伏を捉える試みは大切であり、筆者においてこれからも引き続きおこなっていかねばならない課題であると考える。

注

(1) 武田泰淳「獸の徽章」「新潮」第五四五號、一九五〇年一月、一七四頁。「武田泰淳全集」第三卷（筑摩書房、一九七二年）に收録。

(2) 周鈺宏主編『民國三十六年上海年鑑』（華東通訊社、一九四七年）D三頁。

(3) 楊家駱主編『大陸淪陷前之中華民國——民國卅七年份中華年鑑——第二冊』（鼎文書局、一九七三年）四八三頁。

(4) 柳雨生の四〇年代までの経歴については、『中華日報』、『大陸新報』、『申報』所載の關連記事、柳雨生『懷郷記』（太平書局、一九四四年）所收の隨筆などに、五〇年代以降の経歴については、張秉權・何杏楓編『香港話劇口述史』（中文大學出版社、二〇〇一年）所收の柳雨生インタビュー「柳存仁『在舞臺的邊緣上』」などによる。

(5) 柳存仁「記約園觀書」「道家與道術——和風堂文集續編」（上海古籍出版社、一九九九年）三五五頁、原載張芝聯編『約園著作選輯』（中華書局、一九九五年）。

(6) 柳雨生「談自傳」「古今」第一〇期、一九四二年一月一日、一六頁。

(7) 茅盾『我走過的道路（下）』（人民文學出版社、一九八八年）二五五—二五六頁。

(8) 柳雨生「海客譚瀛錄」「風雨談」第六期、一九四三年一月、一四九頁。

(9) 本稿では、『續結婚十年』の登場人物・蘇懷青、潘子美、魯思純について、それぞれ蘇青、柳雨生、陶亢徳の辿つた實際の狀況と酷似してい

ることから、この三人がモデルになっていると判断した。なおこれは筆者だけの判断ではなく、すでに王一心『蘇青傳』（學林出版社、一九九九年）、李偉『亂世佳人——蘇青』（上海書店出版社、二〇〇一年）などでも、モデルと断定されている。

(10) 蘇青『續結婚十年（影印本）』（上海文藝出版社、一九八九年）、一九頁、原載『續結婚十年』（四海出版社、一九四七年）。

(11) 蘇青『續結婚十年』では、潘子美は香港から上海に到着後、新聞の編集者になったと書かれている。四二年一〇月二日付『中華日報』掲載の第一回大東亞文學者大會華中代表メンバー略歴では、柳雨生は「宣傳部編審、新國民運動促進委員會秘書」と紹介されている。四三年八月七日付『大陸新報』掲載の第二回大東亞文學者大會上海代表メンバー略歴では、柳雨生は「國民政府新國民運動促進委員會設計委員、國民政府宣傳部編審、中華日報主筆、西洋文學月刊編集、風雨談月刊社長、上海雜誌連合會常務理事」と紹介されている。したがって柳雨生が中華日報に入社するのは、上海到着後すぐではなく四二年一月以降のことと思われる。

(12) 『新國民運動論文選』には日譯本『中國新國民運動論文集』（朝島雨之助譯、太平書局、一九四三年）がある。

(13) 柳雨生「釋新國民運動綱要」、『新國民運動論文集』（太平書局、一九四二年）一七〇頁。

(14) 「特輯・大東亞文學者大會」『日本學藝新聞』、一九四二年一月一日。

(15) 菊池寛「話の層籠」『改造』第二〇卷第一二號、一九四二年一月、九五頁。『菊池寛全集』第二四卷（高松市菊池寛記念館、一九九五年）に収録。

(16) 巖谷大四「中國代表の横顔」『私版昭和文壇史』（虎見書房、一九六八年）、三〇頁、原載『非常時日本文壇史』（中央公論社、一九五八年）。

(17) 中村利男「大陸の浪漫精神（二）」『大陸新報』、一九四三年四月二六日。

(18) 柳雨生「東亞文學の闘兵」『大陸新報』、一九四三年五月四日。

(19) 柳雨生「異國心影錄」『古今』第一九期、一九四三年三月一六日、九〇頁。

(20) 陳青生「抗戰時期的上海文學」（上海人民出版社、一九九五年）二六一頁。

(21) 周海林「風雨談」、その言説に包含された眞實と虚構」『淪陷下北京一九三七—四五 交争する中國文學と日本文學』（三元社、二〇〇〇年）一一五頁。

(22) 柳雨生「異國心影錄」八二頁。

(23) 柳雨生「異國心影錄」八九頁。

(24) 柳雨生「異國心影錄」九〇頁。

(25) 陳青生「抗戰時期的上海文學」三六四頁。

(26) 「編後小記」『風雨談』第九期、一九四四年一・二月合刊、一七三頁。

(27) 河上徹太郎「中國代表の決意」『文藝』第一卷第一〇號、一九四三年一〇月、二二頁。

(28) 陳青生「抗戰時期的上海文學」二四七頁。

(29) 陳青生「抗戰時期的上海文學」二六〇頁。

(30) 柳雨生「序」『懷郷記』三頁。

(31) 上海代表六名のうち邱韻鐸、魯風、關露の三名は中共地下工作員である。

(32) 織田作之助「擧措、親愛に満つ」『文學報國』、一九四三年九月二〇日。

(33) 岡田英樹「第三回大東亞文學者大會の實相」『淪陷下北京一九三七—四五 交争する中國文學と日本文學』、八〇頁）は、中國文學協會設立計畫が頓挫した直接的原因として、周作人の片岡鐵平批判とそれにかかわる「沈啓无破門聲明」の影響があったことを指摘している。張泉「淪

陥時期北京文學八年」（中國和平出版社、一九九四年、一一四頁）は、計畫が頓挫した主要な原因として、多くの文學者が官主導の機構に嫌惡感を抱いたことを擧げている。

- (34) 岡田英樹「第三回大東亞文學者大會の實相」八一頁。
- (35) 劉心皇『抗戰時期淪陷區文學史』（成文出版社、一九八〇年、九九一〇一頁）に、金戈「陶亢德受捕一瞬」（『捕奸錄秘』、青年文化出版社、一九四八年）が抄録されている。
- (36) 堀田善衛「異民族交渉について」（『堀田善衛全集』第九卷（筑摩書房、一九九四年）一七七〜一八〇頁、原載『季刊・現代藝術・三』、みすず書房、一九五九年六月）。
- (37) 河上徹太郎「大東亞文學者會議のころ」（『河上徹太郎全集』第二卷（勁草書房、一九六九年）四三九頁、原載『週刊讀書人』、一九六四年四月六日）。
- (38) 草野心平「日記」『風景』第一卷第四號、一九七〇年四月、二二頁。
- (39) 柳存仁「知堂紀念」『道家與道術——和風堂文集續編』（上海古籍出版社、一九九九年）三二三〜三二八頁、原載『明報月刊』第二八一〜二八二期、一九八九年。
- (40) 譚雯「柳雨生論」『風雨談』第一四期、四四年八月、三六頁。
- (41) 木山英雄「周作人と日本」『日本文化を語る』（筑摩書房、一九七三年）二八〇頁。
- (42) 柳雨生「異國心影錄」八一頁。
- (43) 柳雨生「學優」『懷鄉記』八一頁。
- (44) 劉傑「漢奸裁判」（中央公論社、二〇〇〇年）二六五頁。
- (45) 堀田善衛「上海で考えたこと」『堀田善衛全集』第一四卷（筑摩書房、一九九四年）四四五頁、原載『中國文化』、一九四七年六月。